

注24 犬塚且氏(平安朝における「鏡」の考察)(芸林
7巻3号 昭五・6)

おわりに、拙稿を作成するにあたり、終始懇切丁寧な御
指導と御助言を賜りました、松村博司先生、入矢義高
先生、並びに多くの諸先学に対しまして、厚く感謝いた
します。

〔名古屋市立中央高校教諭〕

伊勢物語の新解釈の試み

1 伊勢物語の研究(二) 1

井上寿彦

本誌第十五号(昭和三九・十一)において伊勢物語の
構成について私見を発表した。

それをきわめて簡単に要約すれば、伊勢物語は恋に関
する小話を、その時間的経過を追って配列しているの
はないか、という推論であった。そしてその配列の中
は、ある章段について現行の解釈を再考し、新しい解釈
が試みられるという問題提起をしておいたのである。

ここでは、伊勢物語の、第二段・第十八段および第二
十段について考えるところを述べてみたいと思う。

(一)

二

むかし、おとこ有(り)けり。ならの京は離れ、この
京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女あり
けり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたち

よりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけ
らし。それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、
いかが思ひけん、時はやよひのついでたち、雨そをふるに
遣りける

起きもせず寝もせて夜をあかしては春の物とてながめ
暮らしつ

この段の解釈を今池田亀鑑博士著「伊勢物語精講」
(学燈社)によつて引用すると、

二段

むかし、男がいた。みやこは奈良から平安京に移り、
このみやこがまだ人家もまばらに、よくととのつていな
かつた頃、西の京に女がすんでいた。その女は世間にあ
りふれた女より一段と勝れた人であつた。容貌も美しか
つたが、それよりも心の方がすぐれていたのだつた。独
身を通していたわけではなかつたらしい。その人に、例

の誠実男が情を交わし、女の許から帰つてきて、何を思つたか、時は三月のついたち、雨のそぼ降る折から、歌をおくつた。

おきもせずねもせて夜をあかしては春のものとしてながめくらしつ

(起きているでなし、といつてねむるのでもなく、貴女とともに夜を明かし、朝帰つてきては、また春の一日をあてどなくあなたを思つて過しました。)

この池田博士の解釈は伊勢物語の現代語訳の代表といつてもいいと思うが、それに従えば、初段第二段第三段を含めて、「第一群・片思いの男の話」という表題でまとめた(本誌十五号・拙稿「伊勢物語の構成」参照)ことは用をなさないのであろう。つまり初段において、「しのぶのみだれ限り知られず」と表現され、第三段で「思ひあらば穉の宿に寝もしなん」と描かれた男女の位置とは同一に論じえない趣が第二段にはあるのである。そこで今少し用語に注意して解釈を考えてみることにする。

「うち物語らふ」という用語は普通どの解釈でも「一夜の契りを結んで」(大津有一著「伊勢物語の新しい解

「交情する」意にはとらなくてもよい語調があると思う。「古今集」が伊勢物語と密接な関係にあること(とくに両者の配列に共通性が見いだされること)はすでに拙稿のべたところであるから、「古今集」の用例を詞書きからさぐつてみることにする。

ものたうびける人	(恋二)	589
ものらいひて	(恋三)	616
えあはで	(恋三)	632
あひて	(恋三)	644
いとみそかにあひて	(恋三)	645
あひしれりける女	(恋三)	654
あひしりて	(恋四)	705
あひしりて	(恋四)	735
あひがたく	(恋四)	736
すまず	(恋四)	745
いとしのびにあひて	(恋四)	747
ものらいひける	(恋五)	
ものひわたりける	(恋五)	
えものもいはで	(恋五)	

積)「懸意になつて」(新井無二郎著「評釈伊勢物語大成」)「関係を結んで、一夜女に逢つて」(窪田空穂著「伊勢物語評釈」)等々、解釈として固定させられたかに見えるが、一方同じ伊勢物語の中に「物語などす」ではあるが、次のような用例があることを見逃すわけにはいかない。

「いかで物越しに対面して、おほつかなく思(ひ)つめたること、すこしはるかさん」といひければ、女、いとしのびて、物越しに逢ひにけり、物語などして、おとこ、

彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ

この歌にめでてあひにけり (第九十五段)

傍線を施した「物語などして」は、上の「物越しに逢ひにけり」から明らかに、単に話をする意であることがわかり、「この歌にめでてあひにけり」が情を交わす意にとれるのである。その他「むかし、おとこ逢ひがたき女にあひて、物がたりなどするほどに、鳥の鳴きければ」(第五十三段)などの例でも、かならずしも慣用的に

あひしりて	(恋五)	780
すみけるを	(恋五)	784
あひしりて	(恋五)	789
あひしれりける人	(恋五)	790

「古今集」においては、恋三の、

631 こりずまに又もなき名はたちぬべし人にくからぬ世にしすまへば

までを「逢はぬ恋」の歌と、それ以下を「逢ふ恋」の歌とみると(小沢正夫氏「三代集の恋の部の配列について」日本文学研究 24・9)「逢はぬ恋」に入る用例は、前二つすなわち、

卷第十二恋歌二

やよひ許に、ものたうびける人のもとに、また人まかりつつせうそこすとききて、よみてつかはしける

589 つゆならぬ心を花にをきそめて風ふくごとに物おもひぞつく

やよひついたちより、しのびに人にものらいひての
ちに、雨のそぼふりけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

616 おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてな
がめくらしつ

両者とも問題はあると思うが、この二者の置かれた古
今集での位置を考えれば、「ものたうびける人」「も
のらいひて」は、直接相手と契つたと解しにくい。
次に「逢ふ恋」についての用例をまとめてみると、

- あふ 5例
- あひしる 6例
- すむ 2例
- ものらいふ 1例
- えものもいはで 1例
- ものいひわたる 1例

となり、とくに「いとしのびにあひてものらいひける
あひだに」(745)の例は「あふ」と「ものらいふ」との

は少し矛盾がありはしまいか。それを合わせ考えれば、
第二段における「うち物語らひて」は「女と物語をして」
の意に解した方がより適切ではあるまいか。それが認め
られれば、古今集・伊勢物語の配列からいつて不都合は
ないのであるが、この歌古来恋の名歌とされてきたこと
は周知の事実である。

(二)

第十七段から第二十段までの四段は「第五群・別れ住
む結果となつた男女の話」のうち「B群・別れた人に
残る未練」としてまとめたものである。このうち第十七
段と第十九段とは問題はないと思われるが、第十八段
第二十段においては少しく説明を加えねばならない。

十八

むかし、なま心ある女ありけり。おとこ近う有(り)
けり。女、歌よむ人なりければ、心見むとて、菊の花の
うつろへるを折りて、おとこのもとへやる。

ゆ

紅ににほふはいづら白雪の枝もとををに降るかとも見
おとこ、知らずよみによみける

区別がはつきりしているように思われる。それはともか
く、古今集では「契をむすぶ」意に用いられたのは、
「あふ」「あひしる」「すむ」などが圧倒的に多かつた
ことがわかる。

かなり煩雑にはなつたが、要するに「物語らひて」は
「ただ女と語をして」と解釈してもよい場合があること
は認められてよいのではないか。

更に一つ加えるならば、第二段において「それをかの
まめ男、うち物語らひて」という「むかし男」の設定で
あるが、「まめ男」について、

むかし、おとこ有(り)けり。いとまめにじちように
て、あだなる心なかりけり。深草のみかどになむ仕うま
つりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちのつかひ
給ひける人をあひいへりけり。……(第百三段)

で読む限り、「まめ男」とは「あだなる心」のない誠
実な男であり、道にはずれれば、それは「心あやまり」
ときめつけられねばならなかつた、という第百三段での
叙述を考慮に入れば、従来の「うち物語る」の解釈で

紅ににほふがうへの白菊はおりける人の袖かとも見ゆ

十八段(解釈)

むかし、浮薄な心で男に接していた女がいた。男はそ
の近くにすんでいた。女は、この男が歌をよむ人であつ
たので、試してやろうと思つて、菊の花の色あせたのを
折つて、男の許へおくれた。

くれなるに匂ふはいづら白雪の枝もとををにふるかと
も見ゆ

(衰えて紅色に美しく色づいているのは、一体どこで
しようか、白雪が枝もたわむほどふつていようにも
見え、そんなけはいはどこにもありません)

男は歌の意を解しなかつたように見せかけて返しの歌を
詠んだ。

くれなるに匂ふがうへの白菊は折りける人の袖かとも
見ゆ

(紅色にうつくしく見える上に、真白に見えるこの菊
は、折り取つて贈つて下さつたあなたの赤と白のかさ
ねの袖口の色かとも見えます)

この段の解釈は、今池田博士の解釈で代表した通りの

ものが多い。そこでこの解釈を認めるとすれば、第十八段は、別れた男女の話ではない、がこの段を第十九段と読み合わせる時、そこにいくつかの類似点が見いだされる。すなわち、「男近うあり」（第十八段）「同じところなれば」（第十九段）と男女の位置の設定は全く同じであり、女の方から男に「心見」（第十八段）た状態は、第十九段に、「女の目には見ゆるものから……さすがに目には見ゆる物から」とあるのと、気分の上で共通するものがある。又女からの呼びかけに対してとつた男の態度は、第十八段「おとこ、知らずよみよみよみける」であり、第十九段「おとこはある物かとも思ひたらず」で、これまた同じような冷淡無関心な態度をとっているのである。

そのように考えてくると、第十八段の「おとこ近う有りけり」は、第十九段の「ほどもなくかれにけり。同じところなれば」と同じ前提をもつものと考えられはしまいか。

今新しい解釈を試みるために、視角をかえて「なま心ある女」と「菊の花のうつろへる」という二語について考察を深めたいと思う。

大殿「あな見苦しや。片隅に籠り居たる生女の着るべき物かは」などの給ひて……（宇津保物語・葦開下・四二六頁）（なお宇津保物語・菊の宴・一九頁にも「生女」の例あり）

今へ昔、京ニ極メテ身貧キ生者有ケリ（今昔物語巻第三十・二二四頁）

されど、父がなま学生につかはれたいまつりて、下藤なれども、「みやこほとり」といふ事なれば……（大鏡第一巻・三七頁）

以上の用例からでは、かならずしも「風流心」云々と解さなくてもよさそうである。この「なま」はかなり広い範囲で使用されたらしく、上記の例以外に、「生良家子」「生手書ク者」（以上今昔物語）「なま腹だたしう」（宇治拾遺物語）等枚挙にいとまのないほどであるが、それらを含めて、「なま」が「未熟」の意味で軽く使われたとするのなら、たとえば第十八段の「なま心ある女」の場合、ある気持になりきつてしまわない状態の女をいうのではあるまいか。にえぎらないというのか、いずれ

「なま心ある女」については、諸註いずれも、「未熟なくせに得意がる女。未熟な風流心のある女」（伊勢物語の新しい解釈）「心ある様をしながら実の伴わぬことか。なまじつかの風流心の意か。「なま」は未熟の意」（大津有一・築島裕枝注岩波日本古典文学大系）「なま」は未熟で、知つたか振りをする女」（伊勢物語評釈）等々であるが、これらは「伊勢愚見抄」（一条兼良）「直解」（三条西実隆）「鬮疑抄」（幽齋）等からの古い解釈にその源流が認められる。

そこで今「なま」についての種々の用例を紹介すると、このおとこなま宮づかへしければ、それをたよりにて、ゑうの佐どもあつまり来にけり（伊勢物語第八十七段）

古代の人は、「あな、いとをし。かしこには、えつかりまつらずこそはあらぬ。なま心あるひとなど、さしあつまりて、すずろはしや。えせで、わろからんをだにこそきかぬ」などさだめて、かへしやりつるもしるく、こかしこになん、もてちりてするときく。（かげろふ日記上・日本古典文学大系（以下同じ）一二四頁）

にせよはつきりしない心というふうに解しえないだろう。この場合、第十九段と類似の状況であることを考えれば、「離婚したのに相手を忘れきれずに未練らしく思っている女」と解せばよいのではないか。

「菊の花のうつろへるを折りて」の、うつろへる菊については、それを賞讃する故ととる場合が多いが、この場合もつと意味深長なものがあるのではないか。すなわち、うつろへる菊につけておくつたということは、相手の気持が他へ移つたということと掛けていはいはしまいか、というのである。「かげろふの日記上」（岩波・日本古典文学大系一一七頁）にもそうした例が見つけられるのである。

「さればよ」と、いみじうこころうしと思へども、いはんやうも知らであるほどに、二三日ばかりありて、あか月がたにかどをたたくときあり。さなめりとおもふにうくてあけさせねば、れいの家とおぼしきところにもおしたり、つとめて、なほもあらじとおもひて、歎きつつひとりぬる夜のおくるまはいかにひさしきものとかはしる

とれいよりはひきつくりひて喜きて、うつろひたる菊に
さしたり

そのように考えてみると、「紅にほふはいつら」の
歌には男の心をこころみよとする女の気持がさらに鮮
明に浮び上つてくる。すなわち、「紅にほふ」という
紅は、普通白菊が移ろう（衰え）てからのそれであるう
から、その裏に、八私から他の女へ気を移した様子、と
いった意味がありはしないか。うつろうた菊にあるはず
の紅色がどこにあるのだろうということは、一度は私か
ら気を移してしまわれたが、そんな様子はどこにも見あ
たりませんといつて、女はうつろう菊によせて表面やわ
らかく男の本心を試みたのである。

第十七段から第二十段までの四段は、体面は何気なく
女の未練を描いてはいるが、その実、そこには見捨てら
れたくないと恥も外聞も忘れて男にすがりつくはかない
女の宿命みたいなものが共通して描れているのである。
ここに第十八段の新訳を試みると、

むかし、男と別れたもののその男をあきらめきれない
女があつた。相手の男は近くに住んでいた。女は歌をた

にけれ

とてやりたりければ、返事は京に來着きてなん持てきた
りける。

いつの間にかうつろふ色のつきぬらん君が里には春なか
るらし

この第二十段で問題とすべきなのは、「君がため」の
歌の解釈で、これには従来、次の二通りの解釈が行われ
ていた。一つは、藤井高尚・伊勢物語新釈の「師説に、
『此の歌の意は、君にわが心ざしの深きにかなひて、春
ながらも秋のごとく色ふかく染めたりといふ意なるべし。
注どもに秋といふ言になづみて女の心のうつろふ事に心
えたるはいかが。さてはかへしの歌めづらしげなし。又
女の心をうたがふべきよしも、上の詞に見えず』といは
れき。この説いとよし」であり、評釈伊勢物語大成の

「かくこそ秋のみぢしにけれ」の秋を、厭の来る色
に染め出でたといふ注が多数であるけれど、詞書に「い
とおもしろきを折りて」と書き、歌に「君がため手折れ
る枝」というた詞の響きが、厭味をいふのには調和しな
い。且つ女の家を出でてから僅の時間でもあり、別れる
時に何等不平の詞もない。又それでは女の返歌が殆んど

しなむ人だつたが、もう一度男の本心を試めさずにはお
れなくなつて、菊の花の紅に移ろうたのを折つて、男の
もとへおくれた。

菊は移うて紅になるといいますが、その美しい紅はど
こにあるのでしょうか。白雪が枝もたわむばかりに降つ
たのかと思われるくらい、この菊はまつ白にみえます
（あなたは一度は私から気を移してしまわれたが、今
私のみますところそんなご様子はどこにもありません
わ）

おとこは、知らん顔して返歌した。

紅に美しく映えているその上が真白いこの菊はこれを
手折つた人の袖口の色を思わせます

(三)

二十

むかし、おとこ、大和にある女を見て、よばひあひに
けり。さて、ほど経て、宮づかへする人なりければ、帰
りくる道に、やよひばかりに、かえでのみぢのいとお
もしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる。
君がためたおれる枝は春ながらかくこそ秋のみぢし

鸚鵡返しとなつて、何等の珍しい所もない歌となる。そ
れ等の点から見ると、我が思ふ心の色に、染め出された紅
葉」と解いた方が、趣があつてよいのである」等である。
そして最近の解釈もほとんどこれ等に拠っていると見られる。

一方室町時代に行われた古い解釈では、「きみがため
にもたをれる枝なればもみぢすまじき頃なれどかく色づ
けるといへり。わりなき心の色を紅葉についていへる歌
也」（愚見抄）「君がためにと思ひて手折えだの春なが
らかくもみぢするはそなたの心の移らふ故にやとの心也」
（直解）（いずれも考証伊勢物語詳解・鎌田正憲による）
等の解釈もあつた。つまるところは「秋のみぢ」を、
男の女を思う深い心が色に出たとするの、それとも女
が心変りしたと解するのかが問題の焦点であろうかと思
う。そこで今、この段の男女の置かれた状況を調べてみ
ると、ある男が、女にいいよつて逢うことができた。し
ばらく女のもとにいたが、男は宮づかえをしている身で
あつたので京へ帰つてくる道で、・といふのであるが、
伊勢物語の他の部分で次のような「宮づかへ」の実体を
とらえることができる。

おとこ、宮づかへしにとて、別れおしみてゆきけるま

まに、三年ござりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、今宵あはむとちぎりたりけるに、このおとこきたりけり(第二十四段)

むかし、おとこ有りけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。(第六十段)

その母、長岡といふ所に住み給(ひ)けり。子は京に宮づかへしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず(第八十四段)

童よりつかうまつりける君、御髪おろし給うてけり。正月にはかならずまうでけり。おほやけの宮づかへしければ、常にはえまうでず(第八十五段)

第二十四段では、「宮づかへ」に行つて三年間帰りえなかつた故に、最愛の妻を失つた男の悲劇であり、第六十段では、宮づかへの忙しさに自分の妻さえめんどうをみきれなかつた男の話である。同じように第八十四段八十五段の話は、宮づかへの故に、その母を、その大恩ある君を十分お見舞できないというきびしい現実を伝えて

たは他へ氣を移してしまわれたのかしら。このかえでの小枝をみていると、あなたの里では春がなくて秋(厭)ばかりのようですね。

つまりお互に「宮づかへ」故に別れねばならない運命の下で感情のたかぶりをおさえて、相手の名残を惜しむといつた一抹の悲哀がそこに流れているのである。

そのように考えることが認められれば、第十七段からの四段は「別れた人に残る未練」という共通テーマで貫ぬかれるのである。

以上、拙稿「伊勢物語の構成」についての疑点をいくぶんかははらしつつ、新しい解釈を試みた。伊勢物語の解釈の難解さについていささかは知る故に、小論の及ぶところ十分ではないが、その他の疑義についても読者諸氏のご高見ご指導を待つところである。

(テキストは岩波書店刊・日本古典文学大系9・大津有一・築島裕博士校注になる「伊勢物語」を使用した)

(愛知県立小牧高校教諭)

痛ましい。

とすれば、「むかし、おとこ」が「宮づかへする人」であるので京に「帰りくる」のであるなら、当然男はもうこれからは簡単に「大和」の女に逢えるとは思えないし、女の方でも、男がなかなかかまやつてこれないだろうことは暗黙のうちにはわかつていたと読んでいいのではないか。したがつて解釈としては、古注にもどつて考えたと思うのである。そこで新しい解釈を記すと、

むかし、おとこが、大和に住んでいた女にいいよつて、親しくなつた。さてしばらくして、男は宮仕えする人であつたので、京へ帰らねばならなくなつたみちすがら、頃は三月ばかり、かえでの若葉のあかい、大層美しいのを折つて女のもとにおくつた。

あなたのためにと手折つた、このかえでの小枝は春だといふのにもうこのように秋の氣配をみせてあかく染つています。お別れしたばかりなのにあなたの心にももう秋(厭)がきたのではありませんか。心配ですといつてやつたのだが、その返事は都に到着してからとどけられた。

お別れしてまだ間がないというのに、いつの間にあな